

出雲雄大, 佐藤雅昭 (編)

仮想気管支鏡作成マニュアル 迅速な診断と VAL-MAP のために

池田徳彦

東京医科大 主任教授・呼吸器・甲状腺外科

近年, あらゆる領域において CT が汎用され, 一般的な検査としての意味合いが強くなってきたと感じている。呼吸器領域においては小型肺癌, 特にすりガラス状の陰影は胸部単純 X 線では描出されず, CT が発見の契機になることが多々経験される。このようなことが早期肺癌増加の最大の原因であり, 日常で遭遇する「肺癌像」は明らかに異なってきた。早期肺癌は予後良好であるが, 気管支鏡で確定診断するためには腫瘍径が小さいほど苦勞を伴う。手術に際しても根治と機能温存を両立することが期待されるため, 胸腔鏡手術や縮小手術など高度な技術が要求される。また, CT ですりガラスを呈する症例は術中に局在診断が困難な場合さえある。

CT で腫瘍の局在や性状, 周囲への浸潤などを評価しつつも, 最近では 3 次元画像を作成して種々の用途

に用いるようになった。3 次元画像で肺血管を描出することにより症例ごとの血管の走行が明らかになり, 手術のシミュレーションに用いることが可能となった。手術ナビゲーションにも利用すれば手術安全に寄与すると確信する。小型陰影に対する気管支鏡診断の際には 3 次元画像による仮想気管支鏡画像を作成し, ナビゲーションとして利用することが必須であろう。小腫瘍の術中の局在同定にも術前のナビゲーションを併用した気管支鏡によりマーキングを行うことが有用である。

上記の内容は呼吸器を専門とする医師が強く認識していることであり, これを明快に解説したのが『仮想気管支鏡作成マニュアル—迅速な診断と VAL-MAP のために』である。従来の診療方法では早期肺癌に対する質の高い診断, 治療を行っていたとは言い難い時代となってきた。通

常の CT 画像から 3 次元画像を作成することは短時間かつ容易であり, 即刻に日常診療に導入すべき技術である。

本書は仮想気管支鏡を中心に, 原理, 適応, 画像の作成法, 応用技術など必要事項をくまなく網羅し, 理解しやすく解説してある。技術の導入から熟練まで最短の時間で到達することができるであろう。必須とされる新技術の均てん化に有益な書を執筆いただいた出雲雄大先生, 佐藤雅昭先生に心より敬服する次第である。本書を多くの呼吸器を専門とする医師に熟読いただきたいと強く願うものである。

●B5/頁 144/2017 年

定価: 本体 8,000 円+税

[ISBN978-4-260-03052-6]

医学書院 刊